

『百鬼夜行絵巻』と『天狗草紙』の関連性

——妖怪退散をめぐって——

はじめに

名 倉 ミサ子

『百鬼夜行絵巻』の中で、最も制作年代の古い真珠庵本（京都大徳寺塔頭・真珠庵所蔵）の巻末には、火の玉が描かれている。画面の上方に浮かぶ赤い半円状の球からは、炎が噴き出しているように見える。周辺が夜の暗さを思わせる色調の中で、炎を噴く火の玉は、「闇に出現したまっ赤な火の玉^①」と形容されるに誰しも異存のないものと思われる（図1・図2）。絵巻を紐解くと同時に、左方へ向かつて進みはじめた六十余を数える妖怪たちの行進は、巻末に至ってこの火の玉の出現によって、突如、終わりを迎える。火の玉は、一体何を意味しているのか。

これに関する先行研究として、主にふたつの説がある。ひとつは朝日と捉える説とふたつ目は尊勝陀羅尼の威力とする説である。初めに朝日説であるが、妖怪は夜出沒して朝日とともに立ち去るのが、「日本におけるもつとも一般的なあり方^③」とされていた。そのためか、百鬼夜行を描いた真珠庵本巻末の赤い火の玉は、従来朝日と受け止められて、久しく異論が唱えられることはなかった。

次に尊勝陀羅尼説は、『百鬼夜行絵巻』と『付喪神記』の影響関係に着目したものであった。^④『付喪神記』とは、長年使用された古道具たちが、捨てられたことを恨んで付喪神と化す。人間に害をなした拳句に、祭礼行列を繰り出す

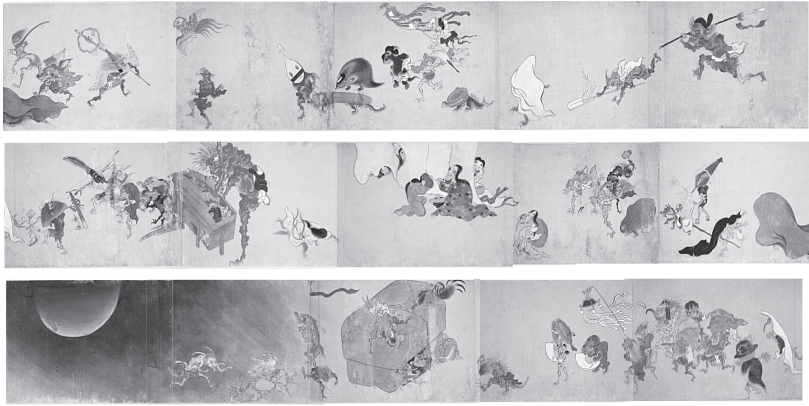


図1 真珠庵本

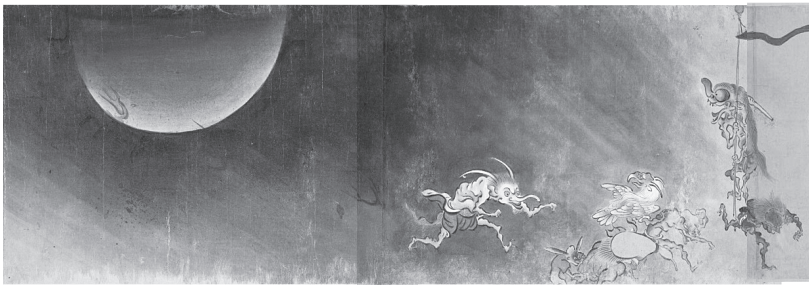


図2

が、尊勝陀羅尼の御守から生じた炎によって退けられ、発心修行の末に成仏する、という物語を持つ絵巻である。

田中貴子氏は真珠庵本に『付喪神記』との関係性を見て、尊勝陀羅尼説を提示した。即ち、『付喪神記』の一系統から、祭礼行列の部分だけを切り離して独立した絵巻と捉えたのである。

その後、第三の説として、西山克氏^⑥は近年(二〇一六)火の玉を皆既日食とする見方を示した。『百鬼夜行絵巻』を所蔵する真珠庵の開祖、一休宗純の周辺で絵巻が制作された可能性を探ろうとする観点から、一休の詩と、天体の異変による自然災害に着目したものである。たしかに、火の玉とそこから噴き出す炎の描写は、太陽とその周囲を取り巻くフレアを想起させないものでもない。しかし、本稿は以上の先行研究とは別の角度から、火の玉の新たな意味を考察したい。

ここで見通しを示しておく、可能性はふたつある。ひとつ目は不動明王の火炎であり、ふたつ目は火車である。まずひとつ目の不動の火炎について。真珠庵本には天狗が描かれているが、これまで注目されてこなかった天狗を媒介にして見ていく必要がある。すると、天狗は不動明王の火炎をおそれるものとして、当時認識されていたことが確認される。ここから、不動明王の火炎から逃げだすことが考えられる。

ふたつ目の火車は、行列に着目したものである。すでに考察したように真珠庵本の行列は舞樂法会の行列を模したものと考えられる。^⑦舞樂法会の行列は極楽や浄土を希求して行われる。ところが、妖怪の行列はこれとは逆に、罪人を地獄へと運ぶ火車に出会って逃げ出すという、皮肉な描き方になっていると見ることができる。

本稿では真珠庵本巻末の赤い火の玉の意味と、真珠庵本『百鬼夜行絵巻』と『天狗草紙』の関連性について明らかにしたい。

一 朝日説・尊勝陀羅尼説に対する批判——百鬼夜行譚にみる百鬼の退散

ここでは、百鬼夜行退散について説話の表現から検証する。とりわけ朝日説については、西山氏が「室町時代の妖物たちが常に朝日を嫌うという論証を誰もしたことがなく、あるのはその確信だけである」^⑧と記す通りである。そこで、従来当然視されてきた感のある朝日説の実態を、確認しておきたい。説話における百鬼夜行退散の理由を検討するために、用例は伊藤昌広氏の論文「百鬼夜行譚 上／下」^⑨を参考にした。それを末尾に表として示したので参照されたい。

三六話の百鬼夜行譚のうち、朝になって百鬼が退散するのは一〇話、尊勝陀羅尼で退散するのは一〇話である。朝日説と尊勝陀羅尼説は同数であり、どちらも三割弱ではあるが、当時、そのような認識があったことは確認できた。しかし全体を覆うような妖怪退散の普遍的な理由とはなり得ない。

ここで、仏教という視点からもう一度みていきたい。般若心経や不動の呪など、仏法による退散が七例ある。故に尊勝陀羅尼の用例一〇例と合わせると、合計一七話が仏法の力で退散したことになる。これに僧が係わるものや、朝日と読経が重複するものなど八話を加えると、三六話中、延べ二五話となり、百鬼夜行譚には仏教が係わるものがほぼ七割となり、圧倒的に多い⁽¹⁰⁾。

伊藤氏によれば、百鬼夜行譚の目的は「百鬼夜行」を語るのではなく、「仏典の功德」を説くことにあり、話の展開にたまたま利用されたのが「百鬼夜行」だとする。さらに「百鬼夜行」はあまり一般的に流布せず、ある固定化、定着化した話ばかりが多いと結論づけている⁽¹¹⁾。伊藤氏が述べるように、仏典の功德を語るのが百鬼夜行譚の第一義であつたなら、人に害を為す存在である百鬼夜行は、仏法に対立するものとして恰好の材料を提供していたと思われる。

再び尊勝陀羅尼説について補足するならば、尊勝陀羅尼説は『付喪神記』と真珠庵本の共通性に着目したもので、付喪神が描かれ、妖怪の行列が火炎で逃げ出す筋書きも一致しているところから、提起されたものである。しかし、『付喪神記』には、関白が付喪神の祭祀行列を退けるという説話があるが、真珠庵本にそれは見いだせず、あるのは舞楽法会の行列である。二つの絵巻では行列の土台が異なっている。そうであれば、真珠庵本の火の玉を解釈するためには、『付喪神記』に拠るのではなく、それとは別の方向から捉えなおす必要がある。

二 新たな視点——『天狗草紙』への着目

改めて真珠庵本の行列をよく見ると、『付喪神記』には見いだせないものがある。天狗である。付喪神や鬼に交じっているのだが、絵巻が作られた室町時代に天狗は鬼とみなされ、百鬼は付喪神と同一視されていた。たとえば、一三世紀後半の『沙石集』巻第九(二〇)に、「天狗と云ふ事は、日本に申し付けた。聖教に慥なる文証なし。先

徳云はく、釈、魔鬼と云へるはこれにやと覚え侍る。大旨は鬼類にこそ」(傍線は稿者による。以下同じ)とあり、永正五年(一五〇八)の『狂歌合』には、「節分の百鬼夜行といふ物、よろづの古物のあまりに年をふる故に、自然の生をうけてばけ物と也て、こよひありき侍るとなり」とある。天狗・鬼・付喪神は同類と見なされて、真珠庵本の行列に交じりあっているものと見られる。中でも天狗に注目してみると、『天狗草紙』との関連がうかがわれる。そこで、天狗を手掛かりとして火の玉を読み解いていく。

(1) 青鬼の多義性——紺青鬼と天狗

① 天狗

一三世紀末に成立した絵巻の『天狗草紙』は、南都北嶺の諸大寺の僧侶と、当時の新興宗教の中でも際だって反体制派と見なされていた一遍率いる時宗と放下僧らを天狗になぞらえて風刺した作品である。『天狗草紙』によれば、天狗の正体は驕り高ぶり、媚びへつらいから魔道に墜ちた僧である。興福寺巻には、「魔界の果報は驕慢をもて正因とし、詭曲をもて助業とす。慢に七種あり。いはゆる、卑慢・慢・過慢・慢過慢・我慢・邪慢・増上慢これなり。これによりては日本国の天狗おほしといへども、七難をいはず」とある。また、『沙石集』巻一〇末(一一)には、「名聞、利養、我執、驕慢ありて、真実の智慧もなく、戒行も欠けて、物に触れて執着あるは、多聞とはいへども、智慧とは云ふべからず。必ず魔道に入るなり」と記されている。これらはいわば、仏法に背く破戒といえよう。そのような天狗が、真珠庵本『百鬼夜行絵巻』に描かれているのだが、姿はまちまちである。烏天狗と羽のある鼻高天狗の外に、羽も嘴もなく、ただ鼻が高いだけのものもいるが、これらも天狗と見てよい。(図3-7)

南北朝から室町期(一四〇一―一五世紀)にかけて成立した『吉野拾遺』には、修験道における修業の地「紀国」からきた武士の一団の鼻が高いことに注目した話が載る。そこには、「山伏とも見えず、まして人にはあらじ。天狗の類にてあるらん」「天狗ともいはば言はなむいはずとて鼻ひくからぬ我が身ならねば」「極めて御鼻の高く渡らせ給ける

を」などである。この記述から、天狗を鼻高とする認識と、紀国・山伏・天狗をひとつに括る意識がうかがわれる。中世末期から近世にかけて、天狗は修験道との関係を含めた結果、姿は山伏のごとくなり、半鳥半人の烏天狗の形態から離れていつて鼻高となったという¹⁹⁾。真珠庵本に烏天狗と鼻高天狗が混在しているのは、絵巻制作当時、天狗像が変化する過渡期にあったことを表しているのかもしれない。ここで真珠庵本の天狗について確認しておこう。

巻頭から見ていくと、青鬼の前で幣をかざす赤い天狗(図3)、笙を被り錫杖を担いだ鼻高で羽のある天狗(図4)、経巻を頭に巻き法会の一団の真ん中にいる烏天狗(図5)、銅拍子を被り巻物を読み上げて、法会の一団を先導する天狗(図6)、幡を持って行列全体を先導する天狗(図7)の順に出てくる。大方は、仏教色が濃厚な道具を身に着けているが、殊に(図5)の烏天狗、(図6)の銅拍子、(図7)の幡を持つ天狗は、仏教教義の典拠となる経巻を持ち、或いは法会や行列全体の中心部や先頭に位置を占めることで目立っている。これは、天狗が重要な役割にあることを示しているからだと考える。



図5



図4



図3



図8



図7



図6

② 紺青鬼

ところが、天狗は右に挙げたものばかりではない。嘴も羽もなく鼻も高くないために、見た目では分からないが、元を正せば天狗だという鬼がここに描かれている。絵巻の巻頭に描かれている青鬼がそれである(図8)。この鬼はこれまで青い色の鬼、即ち青鬼とされていたが、これは紺青鬼と見られる。青鬼を「紺青鬼」とした場合には、単に鬼の色をいうばかりではない。紺青鬼は、固有名詞として特定の鬼を指すものであり、即座に染殿后と法師にまつわる物語を喚起させるものであった。鎌倉初期の『宝物集』巻第二には次のように記されている。

文徳天皇の御時、柿本紀僧正真済といふ人あり。弘法大師の弟子なり。天皇仏のごとく帰依し給ふ。このゆへに后もかくれ給ふ事もなかりけり。真済后に心ざしふかくおもふ事あり。このことかくすとすれども天下にもれきこえて、あやしみ、我もはちて参内などもせずなりにけり。真済此事をなげきて、つるに入滅しぬ。真済、紺青の色したる鬼になりて、后をなやましたてまつる。

柿本紀僧正真済は染殿后への執着から紺青鬼となった。『平家物語』(第六末)には、「文徳天皇ノ染殿ノ后ハ、紺青鬼ニヲカサレ」とあり、『源平盛衰記』には、「文徳天皇の染殿后は、清和帝御母儀、太政大臣忠仁公の御女也、柿本紀僧正御修法の次に思ひを懸奉り、紺青鬼と変じて御身に近附たりけん」と記されるなど、紺青鬼をめぐる説話は愛欲の物語として、狂言や謡曲にも受け継がれていく。狂言「枕物狂」には、「まった柿の本の紀僧正は、染殿の後を恋いかね、賀茂の御手洗川へ身を投げ、青き鬼となつて その本望を遂げらるる」とあり、謡曲「金輪」には、「恋の身の、浮かむ世もなき加茂川に 沈みしは水の、青き鬼」とあるなど、時代を超えて流布していた。

神野志隆光氏は『源氏物語』諸注釈にある紺青鬼説話について、少なくとも諸注の成立時点(およそ十五〜十六世紀)、「世に恨みをのこして成仏できずに物の怪の類となつて美女にとりついた法師云々」といとき、「紺青鬼」が想起された¹⁵⁾と記している。

紺青鬼を意味する青鬼は巻頭に描かれているが、舞樂法会の次第に照らせば、これは真つ先に演じられる「振鉦」

と重なる位置である。⁽¹⁶⁾「振舞」は法会の開始に先立って邪氣を払い、場を鎮めるために演じられる。⁽¹⁷⁾すなわち、舞樂法会は、愛欲から紺青鬼となった僧正が、邪を祓い場を鎮める曲を舞うことから始まるのである。真珠庵本は舞樂法会の形式と紺青鬼の説話を借りて、僧の愛欲に関する物語の始まりを告げ、真珠庵本を解釈する手がかりにしたもの⁽¹⁸⁾と考える。なぜならば真珠庵本は、愛執に関する破戒を主題にしていると思われるからである。

③ 僧正

紺青鬼は柿本紀僧正であった。ではこれが天狗とどのように係わっているのか。柿本紀僧正は、実は天狗でもあった。これについては、一三世紀に成立した『延慶本平家物語』(第二本)「法王御灌頂事」に、「中比我朝二柿本木僧正ト申シ、高名ノ智者、有驗ノ聖侍キ。大橋慢ノ心ノ故ニ、忽ニ日本第一ノ大天狗トナリテ候キ。此ヲアタゴノ山ノ太郎坊トハ申候也」とあって、柿本木僧正が大橋慢の心によって「太郎坊」という大天狗になったと記す。また、一三世紀初頭の説話集『古事談』巻第三(一六)には、「染殿皇后、天狐の為に悩まされ」とあり、さらに「昔、紀僧正真済存生の日、我が明呪を持す。而るに今、邪執を以ての故に天狐道に墜ち、皇后に着きて悩ます」と記述される。「天狐」とは天狗のこと⁽¹⁹⁾で、真済が天狗とされていることが分かる。

ここで改めて青鬼に注目してみると、鬼は腰に茶色の衣を巻いている。この色は柿衣を示唆するものではないか。柿衣は、柿渋で染めた柿色の衣のことで、山伏が着る法衣をいう。これに関して『大江山絵詞』第二段には、鬼退治に向かう源頼光一行が、山伏に姿をやつす場面がある。「姿を襲して様を変へて尋ね見給へとて、唐櫃の中より柿衣・柿袈裟・頭巾等取り出して」という詞書があり、山伏姿に変装した一行の絵が描かれているが、彼らは茶色の衣に同色の袈裟を着用しており、真珠庵本の青鬼の衣と共通している。さらに『古今著聞集』巻第一七(変化)では、上人が天狗にさらわれる場面に、「柿の衣袴きたる法師のいとおそろしげなるが、いづくよりともなくいできたりて、上人をかき負ひて、空をかけりゆきけり。…これ天狗の所為なり」と記されている。山伏は柿衣を着し、天狗は柿衣を着た法師である山伏に変化するという認識があった。ここから、真珠庵本は衣の色を利用して、青鬼が天狗の

真済であることを暗示した可能性がある。青鬼は紺青鬼であり、紺青鬼はまた、天狗となった柿本木僧正と一体のものであった。

すると、舞樂法会は紺青鬼であり天狗でもある僧によって始まることになる。重要な仏教儀式である行列に、仏法に背いた僧が変じるという天狗が描かれていること自体、注目に値する。しかもそれだけではなく、絵巻の中で要所に配置されているのは、天狗がこの絵巻を解釈する上で鍵となる重要な要素であるからに相違あるまい。巻末で幡を持ち、行列全体を先導するのも天狗であった(図7)。すなわち、真珠庵本は天狗に始まり、天狗に終わる構造を持っている。その場合、火の玉はどのような意味を持つのか。次に検証していく。

(2) 尊勝陀羅尼と不動の火焰

真珠庵本の巻末の場面を見ると、幡を持った天狗は大きく目を見張り、棒立ちになって目の前に現れた火の玉を見ている。手前には、慌てふためいて逃げ出す様子の妖怪がいる。絵巻を『天狗草紙』になぞらえて読み解くなら、彼らは何をおそれ、何から逃げようとしているのか。天狗を中心にして、火の玉の意味を探っていく。

『天狗草紙』三井寺巻A第五段には天狗が酒宴をしている場面があり、山伏に化けた天狗が唄いながら舞っている。その画中詞に、

恐ろしき物は、よな。尊勝陀羅尼・大仏頂・火界の真言・慈救咒・おこないふるす不動尊・所鏽の古剣・赤木の柄の腰刀、ゑた、かきちぎりまでも恐ろしくぞ、覚ゆるく

とある。「尊勝陀羅尼」は、一切の害障を除くという「大仏頂」の功德を説く陀羅尼のことである。⁽²⁰⁾時代による変化はあるが、尊勝陀羅尼には、息災、延命、安産、滅罪など多様な効用が込められており、一〇世紀後半以降の天台宗では特に追善や往生祈願の手段として採用された。⁽²¹⁾前記した資料の百鬼夜行譚では、尊勝陀羅尼が「おはします」と知った段階で百鬼は逃げ出すのであり、害障を除く効用は大きいものと見られる。真珠庵本に天狗が描かれ、天狗は

尊勝陀羅尼を恐れている。ここから、火の玉が尊勝陀羅尼の威力を象徴する可能性はある。

さらに天狗の詞は、「火界の真言・慈救咒・おこないふるす不動尊」と続く。「不動尊」すなわち不動明王は、仏の命によって憤怒の相を示し、大火焰を背負って種々の煩惱・障害を焼き払い、魔軍・仏敵を滅ぼす五大明王、八大明王の一である。「火界の真言」と「救咒」は不動明王の呪文のこと、いずれも災害を免れ、願いが叶うとされている。中でも「火界の真言」は、印を結んで、その印から無量の大火焰が流れ出るのを瞑想しながら唱えるもので、不動明王と火焰との密接な関係性が知れる。同じく天狗に関する絵巻、『是害房絵』（一三〇八）は、大唐の天狗は害房と日本の天狗の仏道をめぐる攻防を描くが、第三段には、不動の炎があらゆる障害や魔を焚焼すると次のように書かれている。

此明王ハ火生三昧ニ入テ、其光普ク無辺ノ世界ヲ照ス。火焰熾盛ニシテ、諸障ヲ焚焼ス、ワツカニ火界呪ヲ誦スレハ、大智火ヲ出シテ一切ノ魔軍ヲ焚焼ス。

また、第二段には、「此人火界呪ヲ誦シテ下ラレケレハ、鐵火輪輿ノ前ニ現シテ飛ケルカ是害房ヲサシテカ、リケレハ」と記され、これに対応する絵では、輪宝が激しい炎をあげて、是害房に迫っている（図9）。右に引用したと同様の記述は、『是害房絵』を謡曲にした能『善界』の中にも、「それ明王の誓約まぢまぢなりといへども、その利益余尊に超え、正しく火生三昧に



図10 『不動利益縁起』



図9 『是害房絵』

入り給ひて、一切の魔軍を梵焼せり」と記される。天狗は不動明王の火焰を恐れるという認識があったことは、以上の資料から確認できる。不動の火焰の激しさは、『不動利益縁起絵巻』の絵によっても知ることができる。そこには、憤怒の形相の不動明王の体から、すさまじい勢いで炎が発する様が描かれている(図10)。

真珠庵本には天狗が描かれている。一方、天狗の出てくる資料には、天狗の恐れるものとして不動明王とその呪文が示されているのに加えて、不動明王は火焰と一体の存在と理解される。さらに不動明王と火焰は仏画や仏像などを通じて、目に見える形で広く知られていたことは想像に難くない。ここから、真珠庵本の火の玉は、不動明王から生じる炎という可能性も出てくる。つまり、天狗を媒介にした場合には尊勝陀羅尼の炎と不動明王の炎という二つの可能性が考えられるのである。燃える火の玉から連想されるのは、どちらか。

妖怪の行列が火の玉で退散する構図は、『付喪神記』で祭祀行列を退散させた説話を連想させるものであるだろう。しかし、行列が舞楽法会を描くのであれば、ここに妖怪が尊勝陀羅尼の炎で退散する『付喪神記』の説話が入り込む余地はないものと思われる。尊勝陀羅尼は、『付喪神記』を通さない限り、すぐさま炎を想起させるものではないからである。たとえば、先に検証した百鬼夜行譚には、尊勝陀羅尼で炎が生じる説話は一話も見られなかった。これに対して、不動明王の炎は天狗が恐れるものとして認識されていた上に、両者は一体となつて連想され得るものであった。これらを勘案すると、燃える火の玉の意味として導き出されるのは不動明王の火焰であり、妖怪たちはこれを恐れて逃げ出したと見ることができるとは、どちらか。

三 『天狗草紙』と『百鬼夜行絵巻』——退散する妖怪

『天狗草紙』に着目したところから、火の玉を不動の炎とする結論を得た。しかしながら、行列全体に目を向けた場合には別の可能性が考えられる。妖怪が模した舞楽法会の行列を退散させるのは何か。ここではそれについて考察

する。

真珠庵本の妖怪には、前述したように天狗が交じっているが、天狗は『百鬼夜行絵巻』にこそ相応しい妖怪といえるだろう。天狗は仏法に背く慢心によって魔界に墜ちた僧侶であり、真珠庵本には、破戒によって畜生に転じた僧が描かれていることが推測されるからである。⁽²²⁾『天狗草紙』興福寺巻には、おごり高ぶり媚びへつらう心の故に、僧らは魔界に墜ちて天狗になると次のように記されている。

魔界の果報は憍慢をもて正因とし、詔曲をもて助業とす。慢に七種あり。いはゆる、卑慢・慢・過慢・慢過慢・我慢・邪慢・増上慢これなり。これによりては日本国の天狗おほしといへども、七難をいはず。これすなはち、興福・東大・延暦・蘭城・東寺・山臥・遁世の僧徒なり。これ皆我執に住し、憍慢をいだき、名聞をさきとす。利養を事とす。かるがゆえに、つねに魔界に墜す。

ここには、我執や驕慢、名門や利養を優先するゆえに魔界に墜ちた諸山諸宗が名指されている。詞書がある上に、『天狗草紙』の絵は具体的であり、画中詞と共に当時の状況を読み取ることができる。原田正敏氏は、『天狗草紙』作者について、諸宗の状況をきわめて客観的に批判的に捉え、そこから当代の僧侶の執着、憍慢を明らかにし、その行動を天狗として表現している。そして現状打破のための方法を天狗の救済という形で論じているとする。

これに対して、真珠庵本には、詞書がないことを別にしても、作者の動機や意図を読み取ることが容易ではない。絵は実際にはたぐさんの情報を含んでいたとしても、具体的あるいは直接的な表現とはいえず、意味を分かりやすく伝えようとするものとは見えないからである。これは『天狗草紙』との大きな違いである。

しかしながら、絵を文献と照らし合せて見ると、真珠庵本は『天狗草紙』と同じく、仏教界の実態を表現していることがうかがわれる。その一つが、稚児である。真珠庵本には、僧を暗示する妖怪とともに稚児と思われる妖怪が描かれている。絵巻が舞楽法会の行列を摸したものなら、稚児は舞楽にも儀式に欠かせない存在であり、むしろ描かれていると考えるのが自然であるだろう。『天狗草紙』にも稚児の姿が散見され、児物語の世界が全体の背景である可

能性が指摘されているが、延暦寺巻に特に多く見られるのは、歴史的事実を反映している。⁽²⁴⁾ 稚児がテーマの一つとなっている可能性については、真珠庵本と通底するところがある。

例えば真珠庵本において、法会を先導する妖怪(図6)は、桜色の衣を着て銅拍子を頭にのせている。銅拍子は、舞樂法会には欠かせない供養舞の「迦陵頻伽」で、稚児が使用する楽器である。色が白く唇が赤いのは化粧を示唆するものと思われ、衣の色と併せて考えると、これは稚児と見られる。この妖怪の鼻は高く天狗と思われるが、法会を先導することを誇っているかに見える。後ろに従う妖怪は黒い衣を着て腰が曲がっているところから、老僧と見られる。この表現の背景には、高慢な修行者が天狗になるという『天狗草紙』が係わっていると推測されるが、この例のように、稚児と僧をめぐる説話や物語への連想をさそう妖怪たちが、絵巻の他の部分にも幾組から見られる。琵琶と琴、杵とその背後の妖怪などである。⁽²⁵⁾

さらに、錫杖をかついだ天狗は空中の鳥兜を見上げているが、鳥兜は舞樂の「迦陵頻伽」を演じるときに稚児が使用する冠である。ここでは稚児を象徴するものと思われる。これを仰ぎ見る天狗らと鳥兜の一組は、『天狗草紙』の醍醐寺の桜会を描いた場面で、僧等が稚児舞の舞台を囲んで稚児を仰ぎ見ている様子を髣髴とさせる。⁽²⁶⁾

稚児と僧との関係、いわゆる男色は当時必ずしも否定されるものではなかったが、愛執は戒に背くものでもある。『沙石集』巻第四(二)は経典を引いて、「愛是れ諸の煩惱の足」とも云ひて、「三界の獄に人をつなぐ鎖は淫欲なり」と云へり。生死の苦の絶えず、会離の悲しみ尽させぬ事、偏に愛欲の因縁なり」と記して、淫心を絶てと説いている。男色のみか、真珠庵本には女犯を示唆する妖怪も描かれている。⁽²⁷⁾ その一例が、染殿后と係わった紺青鬼である。

真珠庵本は青鬼が始まっている。青鬼は愛欲の心によって紺青鬼となり、或いは嬌慢によって天狗ともなった破戒僧の象徴でもある。この青鬼が舞樂法会の行列の初めから走りだし、真珠庵本に天狗の物語が入りまじっていることを知らせている。行列という形に注目してみると、すべてが聖なる儀式であるはずの舞樂法会の行列は、その始まり

から愛欲の物語であることを、この青鬼によって宣言しているとも見えるのである。先項で述べたように、『天狗草紙』に着目した場合には、火の玉は不動明王の炎と考えられる。天狗は確かに重要な要素に違いない。しかしながら、真珠庵本全体に目を向けた場合には、舞楽法会の行列がある。火の玉は行列を締めくくるものとして、この行列全体に意味を及ぼしていることが考えられる。そこで、この行列という全体からその意味を改めて捉え直したい。

『天狗草紙』三井寺巻B第二段には、「天狗、多くは是鶏也。仍つて、畜生道の撰なるべし」とある。真珠庵本に描かれる妖怪は人間以外の生き物、いわば畜生なのだが、多くは破戒によって僧が転じた姿と考えられ、上記三井寺巻に従えば、慢心から僧が転じた天狗は、真珠庵本の妖怪と同じく畜生と捉えることができる。そうであれば、真珠庵本の行列を構成しているのは畜生なのである。本来、極楽や浄土を希求して行われるのが、舞楽法会の行列だとするなら、畜生ばかりの行列を迎える火の玉は、何を意味するのか。地獄の使いの火車と見ることができないのではないだろうか。火車とは文字通り火の燃えている車のことで、罪人を地獄に運んだり、地獄で罪人を乗せて責めたりするのに用いられ、六道絵にも描かれている。獄卒らが引く車の輪の周りから激しい炎が噴き出しているが、そのありさまは真珠庵本の火の玉を想起させる(図11・図12)。燃える火の車は、仏法に背いた罪人を運ぶに似つかわしいものと考ええる。問題の火の玉は、地獄の業火の象徴と捉えることもできる。しかし、球体であることを考慮すると、火の玉は火車と結論付けられる。

『天狗草紙』興福寺本には、「仍、三余の暇をもて画をつくり、天狗の七類をあら



図12 『長岳寺本六道十王図』16世紀



図11 『極楽寺本六道絵』13世紀

はして、人執の万差なる事をしめす。その志、たゞ先哲の域をもて、猶、後昆の嘲をかへりみす」と作者の動機が示されているが、これは真珠庵本に通うものである。当代の仏教界のあり方に対する危機感があればこそ、絵巻を制作したと考えられるからである。天狗が描かれていることに加えて例えば、法会の一団の中心で経巻を頭に巻く天狗などは、当代の法会や僧の世界を捉える制作者の視点が示されたものであろう。⁽²⁹⁾ 何より、莊嚴であるべき舞樂法会の行列を、妖怪の行列として描いたことに、その批判精神の表れを見るのである。

真珠庵本と『天狗草紙』は、諸大寺や新興宗教の僧侶の有り様を、天狗や妖怪に例えて風刺するという内容において通底している。『天狗草紙』との関連を伝えようとして真珠庵本が採った方法が、天狗を要所に配することであつたと考える。いずれにしろ、極楽へ向かうはずの行進が、地獄への行進と転じるならば、舞樂法会の行列を、妖怪の行列に転じた真珠庵本の方法に適うものであるだろう。

むすび

本稿では真珠庵本の巻末で妖怪を退散させる火の玉の意味を明らかにしようとした。初めに、主な先行研究である朝日説と尊勝陀羅尼説について批判し、次に、新たな可能性を二つ検証した。不動明王の火焰と地獄の火車の可能性である。

真珠庵本には要所に天狗が描かれている。そこで『天狗草紙』に着目した。すると、当時、天狗は不動明王を恐れるという認識があり、その上、真珠庵本は『天狗草紙』と密に係わっていることがわかれた。ここから、火の玉は不動の炎であり、天狗に始まり天狗で終わる行列は、不動明王の炎で退散するという結果が導き出される。

しかし、行列という観点からすれば、それに止まらず、火の玉は火車である可能性がより高い。全体としての行列を構成しているのは畜生であり、罪人を地獄へと運ぶ火車に出会って逃げ出す結末こそ、相応しいものと考えられる。

一三世紀末の日付がある『天狗草紙』と、室町時代としか明らかではない真珠庵本の間には、およそ二〇〇年以上の差があるが、二つの絵巻には密接な関連性がうかがわれる。妖怪や天狗になぞらえて仏教界を風刺する姿勢が共通すると見られることから、真珠庵本はもう一つの『天狗草紙』とも呼びうるものだと考える。一方、実際の表現においては大きな違いがある。真珠庵本は、真正面から状況を批判しているようには見えないのである。これは詞書に規定されないことによるのだが、或いは、この絵巻が所蔵される真珠庵という場が影響しているのかもしれない。

真珠庵の開祖・一休宗純に、「抜舌の罪を懺悔す」と題した興味深い偈がある。それは、「言峰 殺戮す 幾多の人／偈を述べ詩を題して 筆 人を罵る／八裂七花 舌頭の罪／黄泉 免れ難し 火車の人」というものである。ここには言葉や文字でさんざん多くの人を傷つけ罵ったことを悔いる姿があり、火車に乗って地獄に行くことも覚悟しているようである。自らを「破戒の沙門³⁰」と呼んだ一休の自嘲と諦観をここに見ることはできよう。

ところが、右の偈を、試みに絵巻に係わらせるならば、真珠庵本はこれとは正反対の位置にある。絵ばかりの絵巻には言葉も文字もないので、「言峰」で「殺戮」する可能性は皆無で、「抜舌の罪を懺悔」する対象とはなり得ない。何を描こうと罪には問われず、「黄泉」も「火車の人」も免れることができるのである。

仮にこのように捉え得るならば、それは痛烈な皮肉であり、「懺悔」どころか、この反転、或いは二重写しの構図を大いに楽しんでいることさえ想像される。そうであるなら、破戒僧であり天狗でもある青鬼が、法会の場を浄める舞樂を担当し、あるいは極樂を希求するはずの舞樂法会の行列が地獄の火車に迎えられるという真珠庵本の方法に通じるのではないか。そこには並外れた諧謔の精神がうかがわれるのである。一休や偈と絵巻との係わりはともかく、このような想像が許されるような場所が、真珠庵だと思われる。所蔵の経緯は不明とされるが、真珠庵本は文字通り、ところを得て所蔵されているのではないだろうか。

注

- (1) 小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』集英社 二〇〇八 四三頁
- (2) 本稿では、鬼や天狗、化物などを含む人知の及ばない超自然的な存在を妖怪とする。
- (3) 注(1)に同じ。二二七頁。小松氏は、真珠庵本について「さまざまな妖怪たちが夜中に練り歩き、朝日が昇るとあわてて退散してゆく」と記す(小松和彦『憑霊信仰論』ありな書房 一九八九 初版一九八四。朝日説は他に、田中市松「百鬼夜行図」(『百鬼夜行絵巻』日本絵巻物集成1 雄山閣 一九二九)。倉本四郎『鬼の宇宙誌』講談社 一九九一 二三八頁。等。安村敏信氏(描かれた妖怪たち)、『HUMAN』6 平凡社 二〇一四・七)は、「光の出現」とする。小峯和明氏は陀羅尼の火の玉の妥当性を認めつつ、火の玉と熱線は妖怪側からみでの色彩であり人からすれば明るい太陽、と解釈する反転の構図の可能性を述べる(妖怪の博物学)、『国文学 解釈と教材の研究』学灯社 一九九六・三三)
- (4) 小松茂美「百鬼夜行絵巻」の謎(『熊恵法師絵詞 福富草紙 百鬼夜行絵巻』日本絵巻大成25 中央公論社 一九七九)。
小松和彦『憑霊信仰論』注(3)に同じ。湯本豪一『百鬼夜行絵巻 妖怪たちが騒ぎだす』小学館 二〇〇五・一二。高田衛「百鬼夜行」総説(『画図百鬼夜行』国書刊行会 一九九二・一二)等。伊藤昌広氏は、『付喪神記』冒頭の「付喪神」の考え方から真珠庵本の「百鬼」が想像されたとする(『百鬼夜行譚上/下』(『伝承文学研究』30/31 三弥井書店 一九八四・八/一九八五・五))
- (5) 田中貴子『百鬼夜行の見える都市』新曜社 一九九四
- (6) 西山克「妖物絵」の誕生―『百鬼夜行絵巻』とはなにか―(『関西学院史学』43 二〇一六・三)
- (7) 名倉ミサ子『百鬼夜行絵巻』の行列と舞臺法会(『伝承文学研究』61 三弥井書店、二〇二二・八)
- (8) 注(6)に同じ。
- (9) 伊藤昌広「百鬼夜行譚上/下」(『伝承文学研究』30/31 三弥井書店 一九八四・八/一九八五・五)
- (10) 「百鬼夜行」と明記されるのは傍線をつけた六例のみであるが、状況から百鬼の夜行が想像されるものは百鬼夜行譚と見なす。以下は、百鬼夜行退散の理由を表の番号から取り出したもの。朝日(1・5・17・18・19・22・24・25・29・35)。尊勝陀羅尼(2・3・6・11・12・14・15・28・30・31)。仏法(4・10・13・19・26・27・33)。朝日と仏法(1・5・17・29)。僧が係わる(16・20・34・36)。個人の資質(7・9・32)。陰陽(8)。不明(21・23)。ここで見てきたのは百鬼夜行

譚であり、集団をなさない個々の妖怪の退散については、不詳。

(11) 注(9)に同じ。

(12) 田中貴子他『図説百鬼夜行絵巻をよむ』河出書房新社 二〇〇七(初版一九九九) 参照。

(13) 若林晴子『天狗草紙』に見る鎌倉仏教の魔と天狗(「絵巻に中世を読む」吉川弘文館 一九九五)

(14) 小松和彦『憑霊信仰論』(注(3)に同じ)。最初は普通の古道具として描かれたものが、付喪神になると古道具と人間や動物、鬼などが混合した器物の妖怪となり、次第に器物的属性を失って鬼に近い妖怪として描かれるようになるとする。

(15) 神野志隆光『紺青鬼攻 特に真済をめぐる』(「国語と国文学」東京大学国語国文学会 一九七三・一)。特に近世初期の注釈書では、男女の愛恋からむ「うらみ」を直ちに染殿后と紺青鬼の話に結びつけ「紺青鬼の事」とされたという。天狗や鬼に関しては、小峯和明『説話の森』大修館 一九九一参照。

(16) 注(7)に同じ。

(17) 小野功龍『仏教と舞楽』法蔵館 二〇一三

(18) 名倉ミサ子『鍋と釜「百鬼夜行絵巻」に見る神事の位相』(『怪異・妖怪文化の伝統と創造―ウチとソトの視点から―』国際日本文化研究センター 二〇一五・一 一九一―一三六頁)。名倉ミサ子『百鬼夜行絵巻』に描かれた妖怪と仏教「第24回全伯日本語・日本文学・日本文化学会 (XXIV ENPUJIC) / 第11回ブラジル日本研究国際学会 (XI CIEIB) 合同報告集、二〇一七・一〇 三九一―四〇八頁。

(19) 『古事談』新日本古典文学大系41 岩波書店 二〇〇五 脚注参照。

(20) 仏教語については、特に注記しない限り、石田瑞麿『例文仏教語大辞典』小学館・『岩波仏教辞典』岩波書店。を参照。

(21) 上川通夫『日本中世仏教と東アジア世界』塙書房 二〇一二 一九三―二二八頁参照。

(22) 注(18)に同じ。

(23) 原田政俊『天狗草紙』にみる鎌倉時代後期の仏法』(『仏教史学研究37(1)』一九九四・七) 四〇―七九頁

(24) 阿部泰郎『魔界の住人たち―天狗の図像学―』(別冊太陽『日本の異界をのぞく』平凡社 二〇一〇)

(25) 梅津次郎『天狗草紙について』(『天狗草紙 是害房絵』新修日本絵巻物全集27 角川書店 一九七六)

(26) 名倉ミサ子『鬼と僧―『百鬼夜行絵巻』が語るもの―』(『あいち国文』2 二〇〇八・七)

(27) 注(26)に同じ。

(28) 名倉ミサ子『「百鬼夜行絵巻」に描かれた妖怪と仏教』注(18)参照。なお、上記論文では、採物が描かれていることから真珠庵本の行列を祭礼行列とし、『付喪神記』と岩瀬文庫蔵『百鬼夜行画巻』跋文とを考察して火の玉を尊勝陀羅尼の炎としたが、本稿ではこれを改めた。

(29) 注(26)参照。諸宗への批判については上記論文で少し触れたが、別稿に詳述予定。

(30) 平野宗浄『一休和尚全集第一巻 狂雲集(上)』春秋社 一九九七 三二三頁

資料 表 百鬼夜行の退散

(注)伊藤氏の論文にある四一話のうち、近世を省略するなど私に三六話を取りあげ、一部並べ替えた。
 ..一段目は資料番号。太字は仏教と関わる部分。関係人物(一)内の数字は同話・類話の資料番号)

	文献	百鬼夜行	退散・除難	関係人物
1	『大日本国法華経験記』上巻第十一「吉野奥山の持経者某」	異類異形の鬼神禽獸、数千集会せり。馬面牛形、鳥頭鹿形、…	聖人発願して 法華経 を誦し、 天甌 の時に至る。廻向し已りて後、集会の大衆、渴仰礼拝して、各々分散せり。	沙門義春
2	『大鏡』第三巻「師輔」	百鬼夜行にあはせたまへるは、	「さきをたかくをへ。ざうしきども、こゑたえさすな…」… 尊勝陀羅尼 をいみじうよみたてまつらせ給。	藤原師輔
3	『江談抄』第三雑事「野篁ならびに高藤卿、百鬼夜行に遇ふ事」	百鬼夜行に遇へる時、高藤車より下る。夜行鬼神ら…	「 尊勝陀羅尼 」と称へり…その衣の中に、乳母の尊勝陀羅尼を籠めたる故なりと云々。	小野篁・高藤卿

4	『今昔物語集』巻第六「玄奘三蔵渡天竺伝法帰来語第六」	多クノ火ヲ燃シタル者五百人許来ル。：人ニハ非デ異形ノ鬼共ノ極テ怖シ気ナル〔者〕共ノ行ク也ケリ	般若心経ヲ声ヲ挙テ誦シ給フ。此ノ経ノ音ゾ聞テ、鬼共十萬ニ逃散ニケリ。	玄奘三蔵
5	『今昔物語集』巻第十三「修行僧義睿値大峯持経仙語第一」	様々ノ異類ノ形ナル鬼神共来ル。或ハ馬ノ頭、或ハ牛頭、或ハ鳥ノ頭、或ハ鹿ノ形、如此クノ多ノ鬼神出来	法花経ヲ誦誦スル事終夜也。曙ル程ニ成リヌレバ、廻向シテ後、此異類ノ輩ヲ皆返リ去ヌ。	修行僧義睿(1)
6	『今昔物語集』巻第十四「依尊勝陀羅尼験力遁鬼難語第四十二」	多ノ人、人ヲ燃シテ喰テ来タル。：人ニハ非デ鬼共也ケリ	「尊勝真言ノ御マス也ケリ」：燃タル火ヲ一度ニ打消ツ、東西ニ走り散ル音シテ失ヌ。	藤原常行
7	『今昔物語集』巻第十六「隱形男、依六角堂觀音助顯身語第三十二」	人ニハ非ズシテ、怖ゲナル鬼共ノ行ク也。或ハ目一ツ有ル鬼モ有り、或ハ、角生タルモ有り、或ハ手数多有モ有り、或ハ足一ツシテ踊ルモ有り。	「此ノ男、重キ咎可有キ者ニモ非ズ。免シテヨ」ト云テ、鬼四五人許シテシテ男ニ唾ヲ吐懸ツ、過ヌ。	男
8	『今昔物語集』巻第二十四「安倍晴明随忠行習道語第十六」	艶ズ布キ鬼共車ノ前ニ向テ来ケリ	術法ヲ以テ忽ニ我ガ身ヲモ恐レ無ク、共ノ者共ヲ隠シ、平カニ過ニケル	加茂忠行・安倍晴明
9	『今昔物語集』巻第二十七「三善清行宰相家渡語 第三十一」	長一尺許ナル者共：四五十人許ニ渡ル。：口脇ニ四五寸許銀デ作タル牙昨違タリ	其レヲ見レドモ不騒ズシテ居タリ。：心賢ク智有人ノ為ニハ、鬼ナレドモ惡事モ否不発ヌ事也ケリ。	三善清行
10	『打聞集』「玄奘三蔵心経事」	をほくの火ともしたる物四五百人あひぬ。えもいはぬ怖しげなる鬼どものいくなりけり。	心経を音をさゝげて読程に、此音を聞て、鬼十方ににげちりうせにけり。	玄奘三蔵(4)

18	17	16	15	14	13	12	11
『宇治拾遺物語』上巻一ノ三 「鬼二瘤被取事」	『発心集』第四「三八」「三昧座 主の弟子、得法華経験の事」	『古事談』第三「六八」「永超魚 食事」	『宝物集』巻第四	『宝物集』巻第四	『梁塵秘抄』巻第二 二句神歌 491	『古本説話集』下五十一「西三 条殿若君遇百鬼夜行事」	『打聞集』「尊勝陀羅尼事」
居なみたる鬼、…目一ある物あり、口なき物など…いかにもいふべきにあらぬ物ども、百人斗、	さまたざまな形したる鬼神、諸々のたけきけだもの、…馬面なるもあり、牛に似たるもあり。又、鳥のかしらなるもあり。鹿の形なるもあり。	おそろしげなる者共、在家を註しけるに、	神泉苑の前にて「百鬼夜行」にあひてける。	二条あはらの辻にて「百鬼夜行」にあひて、	さ夜更けて鬼人衆こそ歩くなれ	人二三百人許り、火点して、の、しりて来。…手三つ付きて、足一つ付たる物あり、目一付きたる者あり。「早く鬼なりけり」	二三百人火炬して来。…手三付には口一付物有。面に目一つ付物有。目三付物も有。早鬼なりけり。
睨に鳥など鳴きぬれば、鬼ども帰りぬ。	聖、発願して法華経をよむ。睨に及びて廻向する時、此諸々の輩、敬ひ拝して去りぬ。	永超僧都に賛立つる所也。仍りて之れを註し除く。	小袖の頸に尊勝陀羅尼をぬひくゝみたりけるにぞ、	尊勝陀羅尼みてて、鬼難をまぬかれたまへり	南無や帰依仏南無や帰依法	「尊勝陀羅尼のおはします也」と言ふ声を聞きて…東西に走り散る音して失せぬ	「尊勝陀羅尼の御也けり」と云。此音を聞て、多炬火一度打消つ。東西走ちる音して、
翁	義叡(1)	永超僧都	藤原常行(6)	藤原師輔(2)		藤原常行(6)	大將経行(6)

19	『宇治拾遺物語』上巻一ノ一七 「修行者、逢百鬼夜行事」	20	『宇治拾遺物語』上巻四ノ一五 「永超僧都魚食事」	21	『宇治拾遺物語』第一二ノ二四 「一条棧敷屋 鬼事」	22	『五常内義抄』上第十四	23	『古今著聞集』巻第十七 変化 五九二「延長八年七月、下野長 用殷富門武徳殿の間にて鬼神と 出会ふ事」	24	『古今著聞集』巻第十七 変化 五九三「承平元年六月、弘徽殿 の東欄に変化出現の事」	25	『古今著聞集』巻第十七 変化 五九四「天慶八年八月群馬の音 の事並びに鬼の足跡等怪異の 事」
目一つつきたりなど様／＼なり。 人にもあらず、あさましき物ども なりけり。或は角おひたり、頭も えもいはずおそろしげなる物ども 也。	おそろしげなる物ども、その辺の 在家をしるしけるに、 長は軒とひとしくて、馬の頭なる 鬼なりけり。百鬼夜行にてあるや らんと、おそろしかりけり。 天狗共、多ク集テ、田楽ヲ躍ケレ ハ、 人をとらへてひとり行きけり。三 位一人：とものもの火をともした りけり。「神鬼にこそ」…火百あ まりばかりともしたるもの見えけ り。	衣冠着たる鬼の長一丈あまりなる が：十ヶ夜ばかり、曉におよびて 人馬のこゑ：おほく聞えけり：こ れも鬼のしわざにや。 朝また、紫宸殿の前の桜の下より 永安門まで、鬼のあしあと馬のあ し跡などおほく見えけり。	不動の呪をとなへるたるに、… <u>曉</u> に なりぬとて、此人／＼、のゝしりて 帰ぬ。	永超僧都に魚たてまつる所也。さ て、しるしのぞく。 「よく／＼御覧ぜよ」といひていに けり。	「よく／＼御覧ぜよ」といひていに けり。	曉力成ケレハ、 ややひさしくありてぞ消えける。	ややひさしくありてぞ消えける。	右近の陣・下野 長用	やがて失せにけり。 <u>曉</u> （上記参照）	朝また、紫宸殿の前の桜の下より 永安門まで、鬼のあしあと馬のあ し跡などおほく見えけり。	左兵衛の陣・吉 上		

26	『沙石集』巻第五本(一)「円頓学者鬼病免タル事」	行疫神ノ異形ナル、其数モ不知参テ、	「円頓止観」ト云文ヲ誦シケレバ、鬼神イカニモ近ヅク事能ズ：鬼類ドモ去ヌト	山僧
27	『沙石集』巻第七(二〇)「天狗ノ人ニ真言教タル事」	白クキヨゲニ太リタル法師ヲ、手輿ヲ昇テ、小法師二三十人トモシテ	仏ノ後二印結テキタリ。：ヤウノニアソビテ、山ヘ返リ入リニケリ。	修行者
28	『元享釈書』巻第二十九 志三 拾異志「藤常行」	有秉炬火行者。其衆二三三百許人。：皆鬼也。或隻眼一手。三日二頭。奇形異類。甚可怖也。	仏頂尊勝咒在焉。炬火皆滅。鬼隊走散。	藤原常行(6)
29	『元享釈書』巻第二十九 志三 拾異志「大峯比丘」	異類異形。鬼神禽獸。不知其数。	比丘誦經。異衆傾聴。至明相現。各作礼分散。	沙門義叡(1)
30	『真言伝』巻第四「九条右大臣」	百鬼夜行相給ケルニ	尊勝陀羅尼イミシウ読奉給。	藤原師輔(2)
31	『真言伝』巻第四「常行大将」	人二三百人計火燈ノ、シリテ：ハヤウ鬼也ケリト	尊勝真言マシマスアリト云	藤原常行(6)
32	『太平記』巻第五「相模入道弄田楽并闘犬事」	異類異形ノ媚者共ガ姿ヲ人ニ変ジタルニテゾ有ケル。異類異形ノ鷹、山伏ノ質ニテゾアリケル。誠ニ天狗ノ集マリケルヨト	(城入道ガ)中門ヲアララカニ歩ミケル蹕ヲ聞イテ、化物ハ搔消様ニ失セ、	北条高時
33	『三国伝記』巻第二 第二十三「玄辨三蔵渡天竺事」明般若心經也	火燃ツレタル鬼神五百人計過ケルガ、	観音伝ヘ給へる心經ヲ組上臥シ乍誦シ給ケレバ、鬼神等聞之急ギ十方ヘ散失セヌ	玄辨三蔵(4)
34	『三国伝記』巻第四 第二十七「南京永超僧都事」	異類異形ノ鬼王共ガ札ヲ捧テ在家ヲ注ケルニ、	永超僧都ニ贊ヲ立タル意如也。仍テ注スニ之ヲ除ク。	永超僧都(16)

35	『三國伝記』巻第十一 第九 「貧僧依山王恵勤彼岸事」	老若尊卑ノ山伏ドモ、我慢翹、驕慢贅有、或牛頭馬頭ノ像、鳥獸禽獸ノ姿ナル物共…	夜既明ナントシケレバ、彼天狗共又、…虚空ヲ走、東西ニ去ケリ。… 山王権現ノ御方便勝タル難有御事也。	比叡山学徒
36	『山王絵詞』下巻 第九卷〔八〕	百鬼夜行とかや見ゆる者、おほくそ宝前ニ蹲踞して申けるハ、	(楽音樹坊が) 尾崎房をたふへきよしあり、異類者とも退散しぬとおほえて、	楽音樹坊

引用テキスト

- 『狂哥合永正五年正月二日衆儀判後加判者詞』(『群書類従第二十八輯』巻五〇四)
- 『太平記』下巻 吉野拾遺 神皇正統記 校註日本文学大系18 国民図書 一九二五
- 『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』新日本古典文学大系40 岩波書店 一九九三
- 『校訂延慶本平家物語三』汲古書院 二〇〇五 第六末・第二本「法王御灌頂事」
- 『源平盛衰記 下』有朋堂書店 一九一二 「陀卷第十六 帝位非人力事」
- 『古事談 続古事談』新日本古典文学大系41 岩波書店 二〇〇五
- 『大江山絵詞』(『土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』続日本の絵巻26 中央公論社 一九九三)
- 『天狗草紙』(右に同じ)
- 『古今著聞集下』新潮日本古典集成 新潮社 一九八六
- 『狂言下』日本古典文学大系43 岩波書店 一九六一
- 『謡曲集二』新編日本古典文学全集59 岩波書店 一九六三
- 『是害房絵』(天狗草紙 是害房絵)新修日本絵巻物全集27 角川書店 一九七八
- 『沙石集』新編日本古典文学全集52 小学館 二〇〇三 巻第四(二)「上人の妻に後れたる事」・巻第九(二〇)「天狗、人に真言教へたる事」・巻第一〇末(一一)「霊の託して仏法を意得たる事」

表
引用文献

『今昔物語集』『江談抄』『古本説話集』『宝物集』『梁塵秘抄』『古事談』『宇治拾遺物語』∥新日本古典文学大系岩波書店。『栄華物語』『大鏡』『沙石集』『太平記』∥日本古典文学大系 岩波書店。『五常内義抄』『山王絵詞』『中世神仏説話統』∥古典文庫。『発心集』『古今著聞集』∥新潮古典集成 新潮社。『大日本国法華経験記』日本思想大系 岩波書店。『元享釈書』新訂増補国史大系 吉川弘文館。『三国伝記』中世の文学 三弥井書店。『打聞集』白帝社。『真言伝』勉誠社。

図出典

- 図1～8 『百鬼夜行絵巻』真珠庵所蔵データベース
図9 『天狗草紙 是害房絵』新修日本絵巻物全集27 角川書店 一九七八 一九頁
図10 『不動利益縁起絵巻』（『妖怪絵巻 日本の異界をのぞく』別冊太陽170 二〇一〇）二八頁
図11・12 『地獄遊覧―地獄草紙から立山曼荼羅まで―』開館一〇周年記念資料集 富山県立山博物館 二〇〇一 三二頁 六一頁